

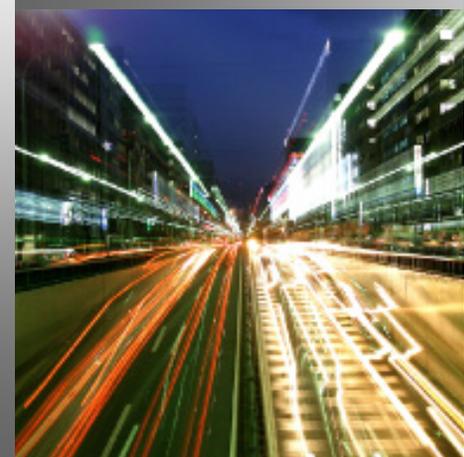


SPI Japan 2006 プレゼンテーション資料

IT in all Based on IT



アジャイルなSPIの提案



2006年10月13日

株式会社 インテック

公共ソリューション事業部

公共ソリューション部

前田 実香

目次

1. はじめに

- 組織の紹介
- 活動の背景

2. アクション

- 計画
- 具体的方策
- 結果分析

3. 結論

- 結論
- アジャイルSPIモデルの提案
- 今後の課題と取り組み

4. 終わりに

1 はじめに

組織の紹介

当部は、弊社における中央官庁並びにその外郭機関や関係機関を顧客として、システム開発の事業展開を行う唯一の部所であります。また、我が国の中核的な地域である首都圏地域において、事業展開を行う部所であります。

公共機関向け

システムコンサルティングおよび提案

システム開発の実施

システムの導入または移行作業

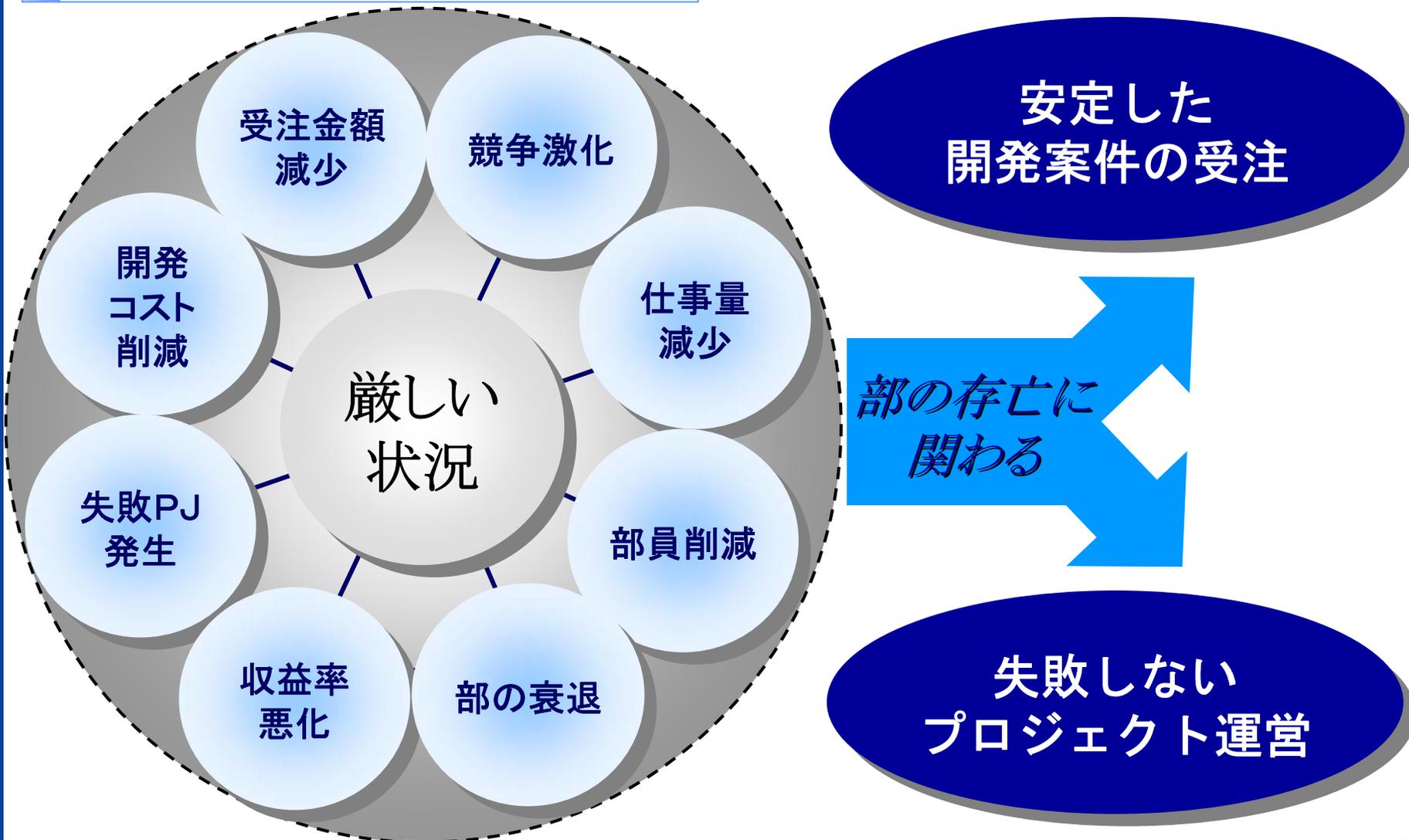
システムの保守およびメンテナンス

ヘルプデスク運用



1 はじめに

活動の背景



1 はじめに

安定した開発案件の受注

公共(中央省庁)関連の動向



随意契約

応札には指定された
資格が必要



入札公告



1 はじめに

失敗しないプロジェクト運営

属人的な活動による
品質の不均一
—成功もすれば
失敗もする—

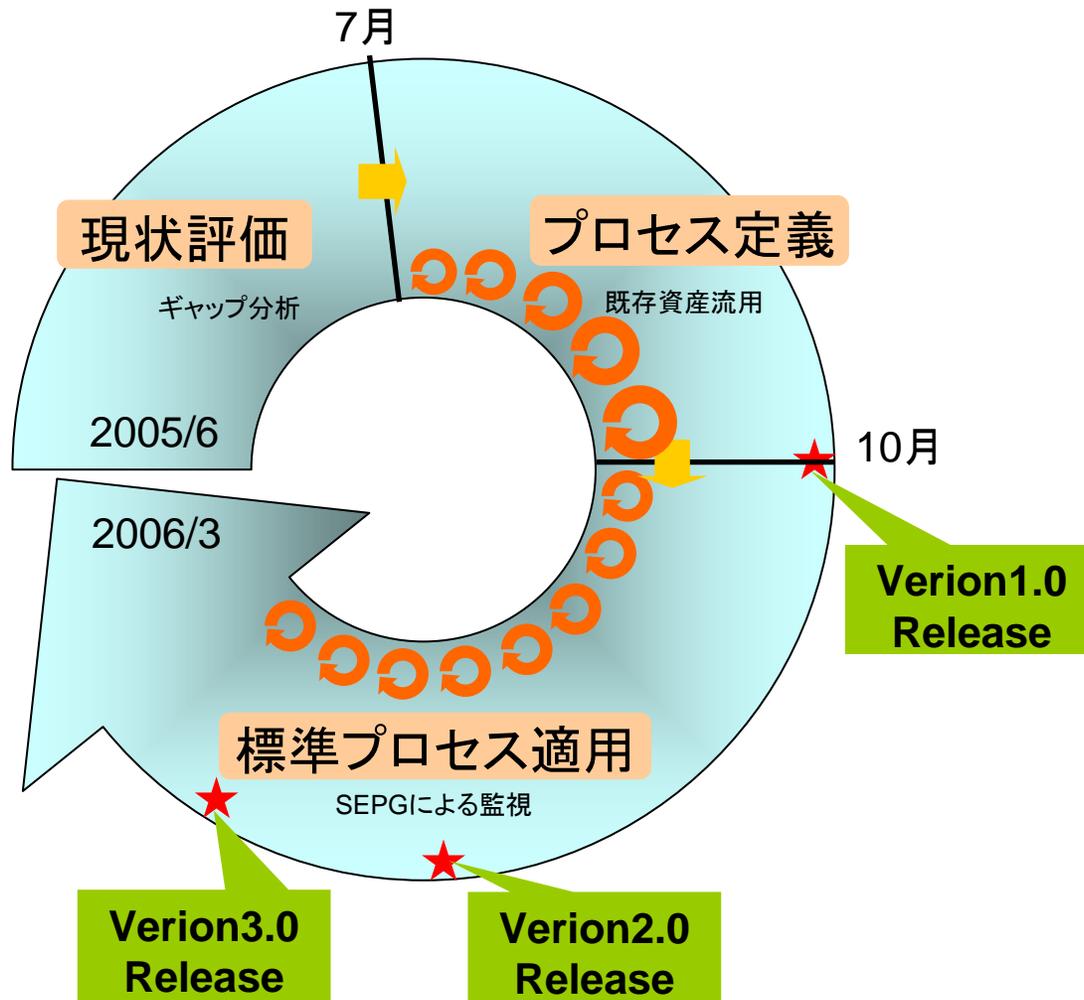
継続的なプロセス改善
同じ失敗を繰り返さない

プロジェクト運営を標準化
組織の監視体制を標準化

組織標準遵守による品質
の均一化
課題・改善提案の共有

2 アクション

計画



2 アクション

具体的方策

(1) ギャップ分析



日常業務の振り返り



CMMIモデル

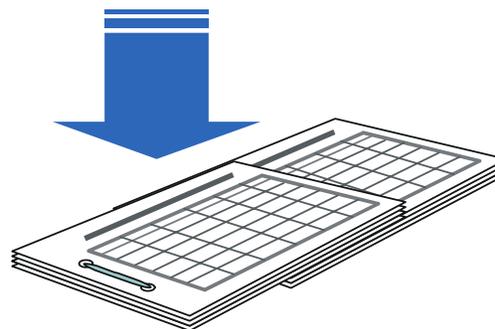
自分たちの日常業務の説明



PIIDs(プロセス実施指標記述)
をもとに現状をチェック

短期間で実施するポイント

- ・有識者のみを対象とした分析
(小規模なたな卸し)
- ・全社標準からの実業務の乖離



抽出された

- ・強み
- ・弱み

2 アクション

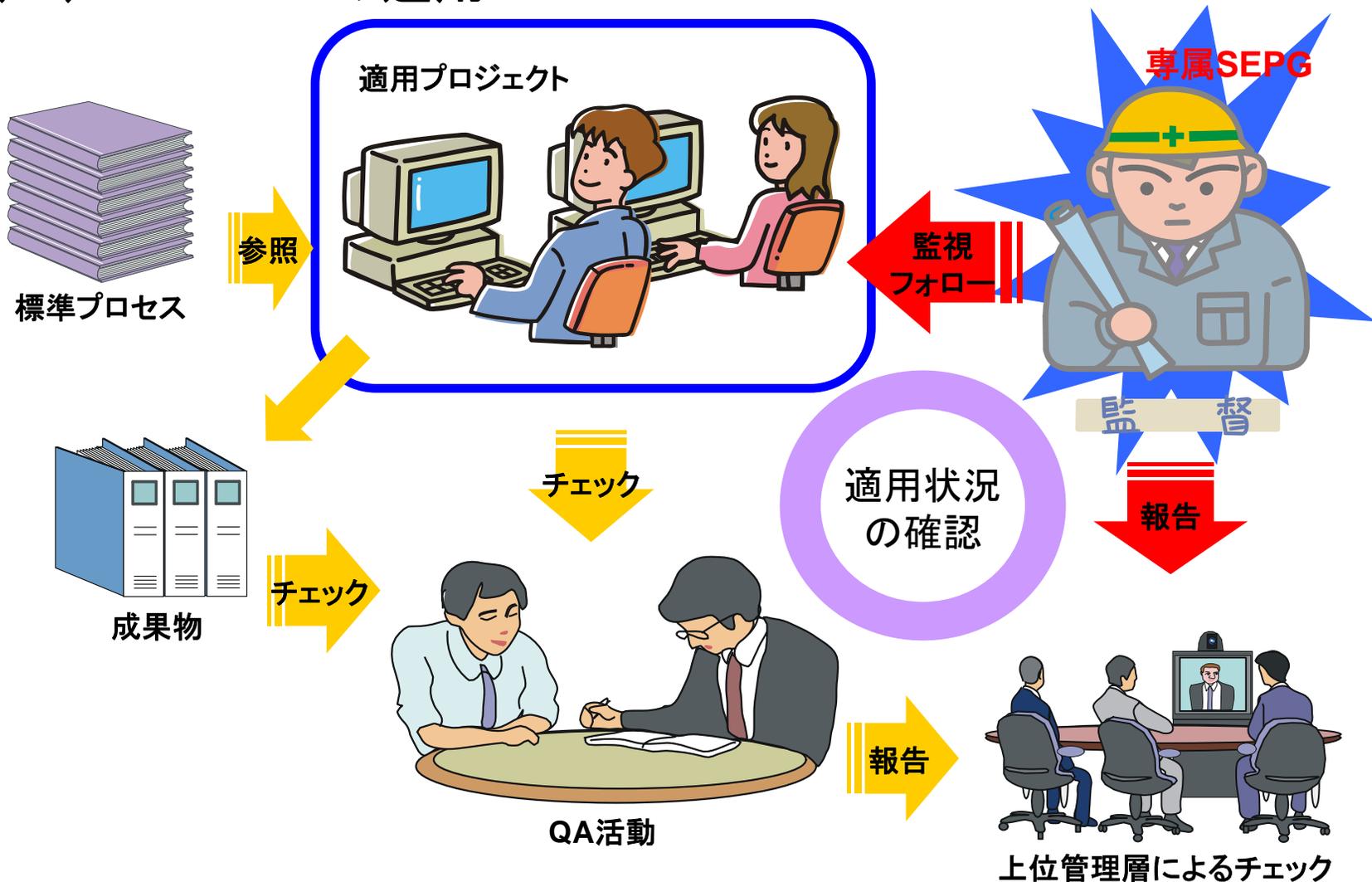
(2) プロセス定義



2 アクション

IT in all
Based on IT

(3) プロセスの適用



2 アクション

結果

(1) アプライザル結果

評価方法	評価モデルと範囲	CMMIバージョン1.1 ソフトウェアエンジニアリング専門分野のレベル3まで
	評価方法	SCAMPIバージョン1.1
	実施日	オンサイト期間:2006/4/25~2006/5/12
評価結果	報告日	2006/5/12
	判定結果	成熟度:レベル3



2 アクション

(2) 施策の評価

ギャップ分析	強み、弱みの把握。 要求事項の理解。 評定時のガイドライン。
プロセス定義 (既存資産流用)	モデルの実装例の参照。 全社標準の過不足の是正。 すばやい標準プロセスの確立。
標準プロセス適用 (専属SEPGによる監視)	プロジェクトへの専用窓口。 上位へのタイムリーな状況報告。 脱落しないためのすばやい組織行動。

3 結論

活動の好影響

◆ 変化への期待感



結果がすぐ反映されることで、改善活動への期待感が高まる。

◆ すぐやる体質

採用へのスピードをあげることで、改善提案が挙がりやすくなる。



◆ 緊張感の持続



集中して一気呵成にやることで、活動の中だるみやモチベーションの低下を防げる。

3 結論

活動の悪影響

◆ 現場の抵抗・部外者の無関心



スピード重視で強く押すと、抵抗勢力が出る。少数精鋭にすると、疎外された人が無関心になる。

◆ テーラリングの幅を狭めた

ほとんどのプロセスでテーラリングを認めない。プロジェクトによっては負荷が重い。



◆ 収益の圧迫



テーラリングできないことに加え、トレーニングがOJT中心になるため、作業工数がかさむ。

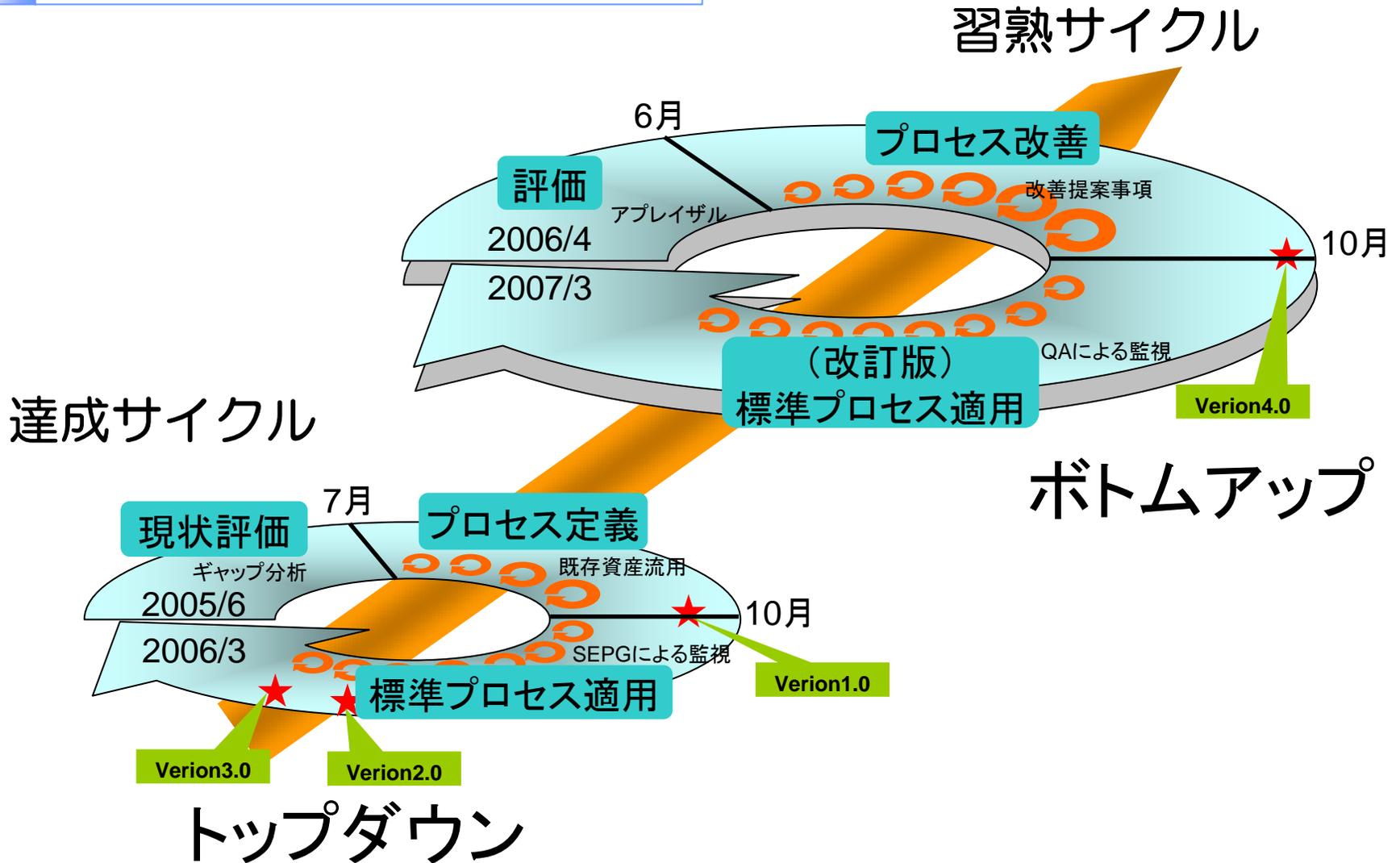
結論

- アジャイルなSPIでは、活動の単位を小さくして、それぞれの目的やゴール、責任を明確にし、最初に方針を示すことが重要である。
- アジャイルなSPIでは、レベル達成はすばやく実現できるが、組織への定着にはそれまで以上の時間が必要になるであろう。

3 結論

IT in all
Based on IT

アジャイルSPIモデルの提案



今後の課題

◆ 上位管理層がSPI活動に積極的に関与し続ける

SPI活動の必要性を上位管理層が理解していないと、適切な資源提供などの支援を受けられず、活動が停滞する可能性がある。

◆ ボトムアップ活動への切り替え

標準が浸透しつつあるが、「活用」に至っていない。
現場からの改善提案の導出基盤が脆弱である。
「よりよいものにしたい」と自ら思える環境づくりが急務である。

◆ テーラリングガイドの充実

レベル達成に主眼を置いたため、ほとんどのプロセスでテーラリングを認めていない。どこまでプロジェクトの独自性を認めるかを議論する必要がある。

3 結論

IT in all
Based on IT

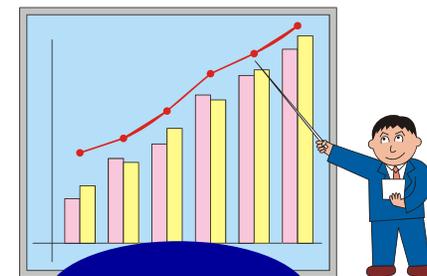
今後の取り組み

現場

管理者層



SEPG



改善提案

テーラリング
見直し

SEPGが
音頭とり

各種報告



全員による
改善活動

必ずどこかの
チームに!

無理なく
適用



MSGによる
改善状況の監視

4 終わりに

ご清聴ありがとうございました

